

THE BOSUI JOURNAL

# 防木ジャーナル

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

8

2014

No.513

特集

● ●  
古くて新しいアスファルト系防水の信頼性  
下水道施設の長寿命化



# 斜壁タイル浮き補修の盲点

鈴木 哲夫

建物は、都市計画により定められた道路斜線などの形態制限があり、壁の一部が斜めになることがある。壁といってもむしろ屋根状になるので、「片流れ屋根」というべきかもしれないが、本稿では「斜壁」と呼称する。

斜壁は、屋根材を使って防水処理を行う場合や外壁と同じタイル張り仕上げとする場合もある(写真-1)。タイル張り仕上げの場合、通常の外壁であれば下地調整後、張り付けモルタルで仕上げるが、斜壁では防水を施すことがあり、外見からでは防水層の有無が全く分からない。タイル張り下地を防水処理するには、付着の問題を解決しなければならないので、防水材料の中でも付着性が高いとされる無機系塗布防水を施していることが多い。しかし、いくら付着性が良いとはいえ、防水層と下地調整モルタルの浮きが界面で発生していることを調査でよく見かける。

また、斜壁部分は躯体の勾配とタイル表面の勾配が一致していることが少なく、仕上げ厚さが部位によって異なっていることが多い。写真-2は、斜壁の上部でタイル引き抜き試験後、コア抜きを

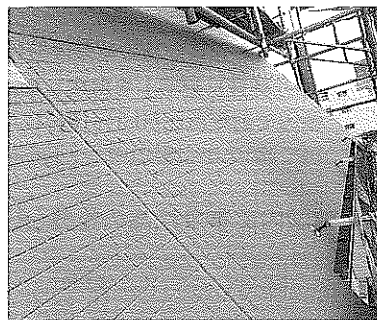


写真-1 タイル張りとした斜壁部分に広範な浮きを確認

行って調べたところ、タイル裏から約28mm(写真矢印)に防水層(防水界面)があり、斜壁下部の写真-3では、約14mm(写真矢印)であった。

どうして下地塗り厚さが異なるか。これは、コンクリート打込み時の躯体精度不良もあるが、タイルの割り付けなど複雑な納まりに対応した型枠の構築が面倒で、あとからモルタルで下地塗りして勾配を整えるため、塗り厚さが異なるのである。

斜壁タイル仕上げに浮きがある場合には、浮きの打音で判断し、アンカーピンの打ち込みと浮き部分の注入処理をすることが一般的である。問題になることは、防水を施したその上の界面に浮きがある場合、アンカーピンの打ち込みで防水層に穴を開けてしまうことだ。そうなると、タイル浮き処理を施すことによって新たな漏水につながる可能性がある。また、浮き界面の位置が部位ごとに異なるため、アンカーピンの躯体への埋め込み深さ(20~30mm)を確保していないこともある。

斜壁は、このような外見で判断できない防水層の存在と下地モルタル塗り厚さに差異があるという盲点がある。浮き部の固定補修は最低でも上下各2ヵ所と中央の5ヵ所を必ずコア抜きし、下地の状態や仕上げ厚さ

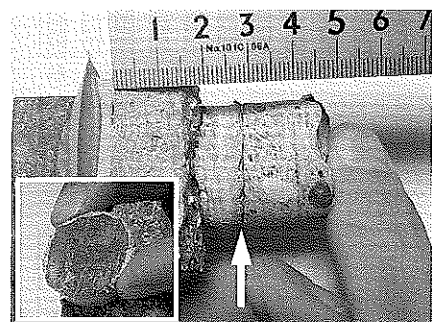


写真-2 斜壁上部(矢印・左下は防水界面)

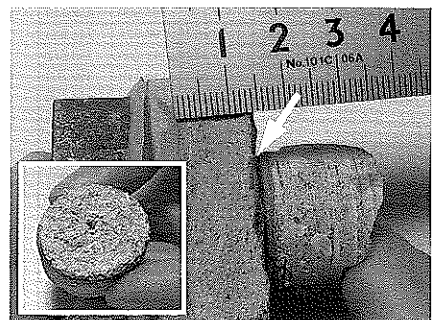


写真-2 斜壁下部(矢印・左下は防水界面)

確認と防水層の有無を確認してアンカーピンの長さを決定すればよいが、それによる防水層の破損については、今のところ確実な防水処理の解決策がみあたらない。

(祐)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役社長)